



## 資産運用こぼれ話 相場局面の見方

寄稿：岡本 和久

理論的には株価は未来永劫に続く企業が支払う配当金の現在価値を合計したものです。つまり、これから配当金がどのように成長していくのか、そして、その将来の配当金が現在の価値にしてどのぐらいの価値があるのかがポイントなのです。株式市場全体で見ればそれは経済成長率と割引率ということになるのですが、もっと端的に言えば、景気と金利ということになります。

景気と株式市場の局面について私が若いころ読み、とても参考になった本に浦上邦雄さんの著書、「相場サイクルの見分け方」があります。景気と金利がどのように相場に影響を与えるか、それを「金融相場」、「業績相場」、「逆金融相場」、「逆業績相場」という四つの局面に分けて解説した本でバブル崩壊直後に出版された本です。



浦上さんの考えを私なりに図にしたのがこれです。これをもとに世界の現状を考えてみましょう。これまで景気が低迷するなか長く超金融緩和、超低金利が続いてきました。この図を時計と見立てれば11時から12時ごろの間でした。ようやく米国を中心に少し景気に明るさが見えだしたのが現状でしょう。そして金利を少しずつ本来の水準に戻そうとしているのが現状です。この図の2時半ぐ

### 外部要因の株価への影響



©I-OVA Wealth Advisors, Inc. Kaz Okamoto 2018, all rights reserved



## 長期投資仲間通信「インベストライフ」

らしいの感じですが。これを見ると相場局面が金融相場から業績相場に移行しつつあることがわかります。

過去を振り返ってみるとだいたい、このような局面の移行期には相場が不安定になるものです。なぜなら方向性がはっきりしないからです。それはこの循環が逆回転することもあるれば、また、加速することもあるからです。それが心理の振れを大きくします。長期的に見れば時計回りにゆっくりと回転しますが、時計と違うのは針が一進一退をしながら進むということです。このような現状を把握しておくことは大切なことだと思います。

私は現在の異常とも言える金融情勢が正常化するには数年かかるのではないかと思います。その間、その間、みんなが喜んだり悲しんだりする振れの大きな相場展開が続くでしょう。人生を通じての資産運用を志す人には、これこそまさに「黄金のシナリオ」です。40歳の人であればいま、しっかりとドルコスト平均法で資産を積み立てておくべきです。いずれにしてもその資金を使うのは今から20～30年先なのです。慌てることはないのです。